指

長谷川ちず

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
指

【Ｎコード】
Ｎ８８７８Ｒ

【作者名】
長谷川ちず

【あらすじ】
青年は突然、真っ白な部屋に連れてこられた。そこに娯楽は無く、青年の精神は磨り減らされていく。そんなある日、ベッドの下で退屈を払拭する希望を見つけた。

そこは壁も床も天井も、備え付けられたトイレやベッドに至るまでもが真っ白な部屋だった。その中には同じく真っ白な服を着た青年が一人。突然、この部屋に連れてこられたのだった。

「いったい、ここはなんだっていうんだ？」

青年は部屋をくまなく見て回るが、シミ一つ見当たらない。便器だってなめられそうなくらいに清潔な光を返している。

「ここで私は何をすればいいんだ？」

青年は自らがくぐったドアに向かって話しかけるが、返事は無い。部屋の中は、青年が今までに感じたことが無い、完璧な静寂に満ちていた。鳥の声も虫の羽音も車の音も機械の動作音さえ無い。青年は試しに壁をノックしてみた。ごつごつという、まるで響かない音がした。耳が聞こえなくなってしまったというわけではないらしい。また、壁はくぐもった音がしたので、おそらくは白い壁紙の裏はコンクリートなのだろう。

一応真っ白なドアも調べてみるが、部屋の内側にはドアノブが無く、さらには鉄でできているため壊せそうもなかった。つまり、ここから脱出するのは不可能なのだ。

そうとわかった青年は、一回だけドアを蹴っ飛ばしてベッドに倒れこんだ。こんなところでは、もはや眠る以外にはすることがないのだ。静寂が自分の鼓動を強調するせいでなかなな寝付くことはできなかったが、羊を千匹も数える前にはなんとか眠りに落ちることができた。白い部屋の影響なのか、夢さえも見ることはなかった。

しばらく経って、青年は目を覚ました。時計も無いから、自分が何時間寝たのか、今が昼なのか夜なのかもわからない。ただ、ベッドが固く、決して寝心地がいいとは言えないことは確かだった。痛む腰を押さえながら欠伸をし、背筋を伸ばす。涙の浮いた目を擦ってから開けると、青年はため息をついた。少なからず、この白い部

屋が夢であることに期待していたのだ。しかし自分を取り囲むのは、相変わらずくすみのない白い壁に白い天井、そして白い床。
「ん？」
部屋をぐるりと見回した青年は、ドアの前にあるそれを見つけた。とても見にくいが、何か床に置いてある。青年はベッドから降りてそれに近づく。同じ白色のせいでわかりづらかったが、それは紙コップに入った牛乳と、耳を切り取られた食パンだった。
「どうやら私が眠っている間に、食事が出されていたようだ。それにしても、食事まで真っ白とは」
青年は自分を閉じ込めている人間の徹底振りにうんざりした。
食パンと牛乳だけの食事はあっという間に済んでしまう。なんせ食パンは四つ折りにしたら一口で収まるくらいだったし、牛乳だってそれを流し込めるほどしかなかったのだ。しかし、ぜんぜん動いていないため、それでも十分ではあった。
食事を終えると、再び暇な時間が始まった。ふと思い当たって、紙コップを壁に当ててみたが、四方どの壁からも何も聞こえてこなかった。床や天井も同じだった。
あまりにもすることが無さ過ぎて、特別、催しているわけでもないのに便器に向かっていた。
「この部屋では、色がついているのは私と、私の排泄物くらいだ。しかし、こんな生活が続けば、髪の毛の色は抜けて白髪になり、日光にも当たらないから肌も白くなってしまう。それに、あんな食事ではいつ小便や糞まで白くなってしまってもおかしくない。せめてすることがあれば、生活に色がつくというのに」
レバーを捻って水を流すと、部屋はまた真っ白に戻った。
それからもすることは現れず、青年はまた羊を数えながら眠りに就き、起きては食パンと牛乳だけの食事を終えて用を足すという生活を繰り返した。その内、何度寝て起きたかも忘れてしまった。
ある時、暇つぶしに紙コップを蹴っていると、ベッドの下に入ってしまった。この部屋には他に時間を消費できるものは無く、仕方

無しに青年もベッド下に潜り込んだ。紙コップは一番奥の、それも隅に転がっていた。狭い隙間を腹を擦りながら進み、ようやく手に取る。すると、紙コップの陰になっていた場所に何かがあった。暗くて輪郭がはっきりしない。青年は隙間から這い出ると、ベッドを横にずらした。蛍光灯の明かりで正体を現したのは、指だった。壁にほんの少しだけ穴が開いていて、そこから白く細い指が伸びているのだ。

「これはもしかすると、この部屋の隣にも部屋があって、そこに誰かがいるのかもしれない」

青年は指の伸びている壁に向かって話しかけた。

「もしもし、この指の持ち主の方。少し、話をしませんか？」

しかし、返事は無い。

「完全に密閉されているのなら、聞こえていなくともおかしくはないが、この壁には穴が開いているのだ。となれば私の声は届いているはずだ。どうして返事をしてくれない」

青年は指に手を伸ばして触れた。滑らかな陶磁器のような感触。これは女性の親指と人差し指に違いないと青年は思った。

「とすれば、怖がっているのだろうか？　確かに、いきなり見ず知らずの男に声を掛けられたなら、そう思ってもしかたない」

そこで青年は声音を和らげ、言い聞かせるように話した。

「大丈夫、私は怖くありませんよ。だいたい、何かしようにも壁が邪魔で何もできない。私はただ、話し相手になってほしいのです。そちらがどうなっているのかはわかりませんが、こっちの部屋はとにかく真っ白で、何も無いのです。このままでは気が狂ってしまいます。というよりも、狂い始めているのです。なんだか最近は思考にもやのようなものがかかってはっきりしない。きっと頭を使うことがないからでしょう。お願いです。私を助けると思って、話を聞いてください」

青年は気付かないうちに、見えるはずの無い壁の向こう側へ頭を下げていた。とにかく生活に代わり映えが欲しくて必死だったのだ。

その懇願が功を奏したのか、壁の指は青年の指を握り返した。
「ああ、ありがとうございます！　これで少しは生活にハリが出ます」
それ以来、青年はひたすら指の相手に話しかけた。向こうからは一度も声がしたことが無いが、それは一つの質問で解決した。
「あなたはもしかして、喋ることができないのですか？」
青年の問いに、指は青年の指を握り返した。それを憐れに思った青年は、殊更に明るい声で指の相手を励ました。
「あなたが喋れなくても、私は疎んじたりはしませんよ。俗世ではそういうのをまるで幽霊や妖怪の類であるかのように恐れたりしますが、ここはもうそんな世界ではありません。あなたは私の話を聞いて、心を救ってくださる天使なのですから、私はあなたに親愛と敬意をもって接します」
そして、指が握り返してくれるのを感じて充足感を得るのだった。
青年が話す内容は様々だった。自分が見た夢や体調、また自分の過去の話もした。
「当然ですが、私だって元々は外の世界にいたのです。そこで私はそこそこの大学を出て、そこそこの会社に入りました。あの頃は毎日毎日パソコンに向かっているばかりで、ただ退屈な日々を過ごしていたように感じましたが、ここに比べればずっとマシでした」
どんな話にでも、指は握り返してくれる。話をちゃんと聞いてくれているのだ。
「やはりずっと牛乳とパンだけでは飽きてしまいます。外の世界では油物ばかり食べていて、医者にはもっとさっぱりしたものを進められましたが、これはいくらなんでもさっぱりしすぎています」
くだらない話にも指は握り返してくれる。
「今、なんとなく逆立ちができそうな気がしたので試してみたのですが、まるで駄目でした。腕の筋肉がすっかり落ちてしまいました」
いつでも何度でも指は握り返してくれる。
「なんだか最近、おかしいんです。運動したわけでもないのに、胸

が苦しくて、息が上がるんです。部屋だけじゃなくて、頭の中まで真っ白になっているような気もするし……」
どんな時でも、指は変わらず握り返してくれる。
「……ああ、真っ白だ……。なにも、かも。目の前がただ、ただ白くて、君の指を探すのも大変になってきた……」
指は優しく、包み込むように握り返してくれる。
「……もう、寝返りを打つことも、できません……。どうやら、お別れの、ようです……。最期に、これだけは、言っておきたいんです……。私は、あなたに会えて、良かった。最期を看取ってくれる人が、いることが……、こんなに、しあわせだなんて――」
指は握り返してくれる。

真っ白な部屋の真っ白なドアが開き、白衣を着た男たちが入ってきた。一人が部屋の隅で倒れる青年の首に指を当てる。
「脈はありません。確かに死んでいます」
青年を取り囲み、男たちは頬を緩めた。
「実験は、成功のようですね」
「ああ。彼はリストラされた恨みで、会社の同僚や上司を五人も手に掛けた男だ。一生刑務所の牢屋から出られないと決まって絶望していたのが、どうだろう。実に幸福そうな、満ち足りた死に顔をしている」
「この方法なら、どんな人間でも幸福の内に死んでいくことができそうですね」
「そうだな。よし、もっと確実なデータを得るには、数をこなさなければならない。次の被験者を連れてくるんだ。それと、そこの食べ残しの処理は気をつけるように。少量だが、毒が入っているからな」
「はい」
青年の遺体と食べ残しはすぐさま片付けられ、部屋には一人の男

だけが残った。男は懐からボタンの付いた装置を出す。
「さて、次の実験の前に動作を確認しておかないとな」
そう言って男がボタンを押すと、指は何も空間を握った。

（後書き）

読んでくださった方には、最大級の感謝の電波を送信します。

うーーーーーーん。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8878r/

指

2011年3月24日14時10分発行